我が国における トラベルクリニックの現状

要 旨

近年、日本の海外渡航者数は増え続け、海外からの訪日外国人旅行者数も急増している。欧米では渡航者の健康問題を扱うトラベルクリニックが数多く設置され、健康指導やワクチン接種、携帯医薬品の処方などが行われているが、日本ではトラベルクリニックはまだ十分に普及していない。しかし、日本渡航医学会のトラベルクリニックサポート事業などにより、トラベルクリニックは地方においても徐々に増えてきている。

〔日内会誌 105 : 2154~2159, 2016〕

渡邊 浩

Key words トラベルクリニック, ワクチン, 海外渡航者, トラベルクリニックサポート事業

はじめに

飛鳥時代に遣隋使として派遣された小野妹子や、江戸時代に漁に出て嵐に遭い、アメリカの捕鯨船に救助され渡米したジョン万次郎の例を出すまでもなく、かつては海外に行く交通手段は船であり、命懸けの航海であったことは想像に難くない。「トラベル」の語源が「トラブル」からきているという説があるのはその意味でもっともなのかもしれない。現在、海外旅行は格安航空会社の普及などもあって安く気軽にできるものとなり、観光、ショッピングなどを楽しむものとなったが、日本においていわゆる「海外旅行の自由化」が実施され、観光目的で自由に海外に行けるようになったのは1964年のことであり、まだ50年あまりしか経っていない。

近年、日本の海外渡航者数は増え続けていた

が、最近20年は年間1,700万人前後で推移している。一方、海外からの訪日外国人旅行者数も円安やビザの緩和などの影響もあって急増し、2015年は約1,970万人となり、初めて訪日外国人旅行者数が日本人海外渡航者数を上回った(図1)。渡航先や旅行形態にも変化がみられ、仕事のため、家族連れで長期間、発展途上国に赴任する場合や、既存の観光地のみならず、冒険旅行などのように従来とは異なる地域に足を踏み入れる場合なども多くなっており、以前より海外で流行する感染症(表)¹⁾が国内に持ち込まれるリスクが高くなっている。また、近年はエボラウイルス感染症や中東呼吸器症候群(Middle East respiratory syndrome : MERS)などの新興感染症の流行もあり、輸入感染症への対応が重要となってきた。

欧米諸国では、海外渡航者の健康問題を扱う

久留米大学医学部感染制御学講座

Up-to-date imported infectious disease. Topics : VII. The current situation of travel clinic in Japan.

Hiroshi Watanabe : Department of Infection Control and Prevention, Kurume University School of Medicine, Japan.

図1 海外旅行者数の推移 (出典：日本政府観光局ホームページ)

表 海外でかかりやすい感染症

(厚生労働科学研究費補助金・新興再興感染症研究事業 海外渡航者に対する予防接種のあり方に関する研究班：海外旅行者の予防接種 Q&Aより引用，一部改変)

感染経路	生活上の注意	感染症	主な流行地域	主な症状	ワクチンの有無
飲食物から感染	<ul style="list-style-type: none"> ミネラルウォーターを飲む 加熱した料理を食べる 	旅行者下痢症	発展途上国	下痢，嘔吐	
		A型肝炎	発展途上国	発熱，黄疸，全身倦怠感	○
		ポリオ	南アジア，アフリカ	発熱，手足の麻痺	○
		腸チフス	発展途上国(特に南アジア)	発熱，腹痛	○*
		細菌性赤痢	発展途上国	発熱，腹痛，下痢，血便	
		コレラ	発展途上国	水様性下痢，脱水症状	○*
患者の飛沫などで感染	<ul style="list-style-type: none"> 手洗いやうがい 人ごみを避ける 	インフルエンザ	全世界	発熱，咽頭痛	○
		結核	発展途上国	咳・たん，体重減少	○
		髄膜炎菌性髄膜炎	西アフリカなど	発熱，意識障害，頭痛	○
蚊に媒介	<ul style="list-style-type: none"> 皮膚を露出しない 昆虫忌避剤を塗る 殺虫剤を散布する 	マラリア	発展途上国(熱帯・亜熱帯)	発熱，悪寒	
		デング熱	東南アジア，中南米	発熱，発疹	
		日本脳炎	アジア	発熱，意識障害	○
		黄熱	熱帯アフリカ，南米	発熱，黄疸	○
性行為で感染	<ul style="list-style-type: none"> 行きずりの性行為を控える 医療行為にも注意 	B型肝炎	アジア，アフリカ，南米	発熱，黄疸，全身倦怠感	○
		梅毒	発展途上国	性器潰瘍，皮疹	
		HIV感染症	全世界(特に発展途上国)	発熱，リンパ節腫脹	
動物から感染	動物に近寄らない	狂犬病	全世界(特に発展途上国)	恐水発作，けいれん	○
傷口から感染	傷口を消毒する	破傷風	全世界	口が開かない，けいれん	○

* 腸チフス，コレラにはワクチンはあるが日本では未承認である。

医療機関としてトラベルクリニックが数多く設置されており、健康指導やワクチン接種、携帯医薬品の処方などが行われているが²⁾、日本では都市部のトラベルクリニックは増えているものの、地方ではまだ少なく、地域によっては海外渡航時のワクチンを接種できる医療機関がほとんどないという場合も珍しくないのが現状である。

本来、海外渡航をする人は渡航地の感染症情報や治安状況を事前に調べ、ワクチン接種をはじめとする必要な感染症予防対策を準備しておく必要があるが、残念ながら、多くの日本人にはまだそのような習慣はない。

1. 健康問題の発生頻度と感染症の種類

海外渡航のリスクは渡航先、渡航形態、滞在期間、渡航目的などによって大きく異なる。例えば、観光で外を歩き回ることが主体の場合とオフィスで仕事をする場合ではリスクは大きく異なる。食事に伴うリスクはともかく、蚊に刺されたり、外傷を負ったりするリスクは外出時が高くなるからであり、当然、それに伴う感染症のリスクも変わってくる。

発展途上国に1カ月滞在した場合、なんらかの健康問題は半数以上の渡航者に発生するとされており、これには疲労や不眠など軽い症状も含むが、下痢や感冒といった実際の病気にかかる頻度は20～30%である。また、発熱や下痢などの症状で、渡航先で、あるいは帰国後に医療施設を受診する頻度は8%、死亡する頻度は0.001%とされている³⁾。このように死に至る頻度は高くないものの、なんらかの健康問題が発生したり病気になったりする頻度は比較的高い。図2に発展途上国への旅行者における各感染症の1カ月間の推定罹患率を示す⁴⁾。発展途上国への渡航により罹患する感染症としては、旅行者下痢症やA型肝炎などの水や食物に関連した感染症が最も多く、それに次いで、マラリアやデング熱などの蚊が媒介する疾患、感冒やイ

ンフルエンザなどのヒトからヒトに伝播する呼吸器感染症が多いが、近年、狂犬病のリスクのある動物咬傷が増加傾向にある。B型肝炎やHIV (human immunodeficiency virus) 感染などの性行為感染症の頻度は低い、これらの疾患は重症化や慢性化することがあり、注意を要する。また、感染症以外でも高地に行く人に発症する高山病、スキューバダイビングなどに伴う潜水病、長時間の飛行機搭乗などで発生するロングフライト血栓症、基礎疾患の悪化、交通事故、時差ぼけ、乗り物酔いなど、海外渡航中に発生し得る健康問題には幅広い病態や問題を含んでいる。

2. 海外渡航者にとってのワクチン

海外での滞在中、特に発展途上国への渡航者はその地域にみられる各種の感染症の危険にさらされるため、できる限り適切なワクチンを受けておくことが望ましい。2006年、フィリピンより帰国した日本人2名が相次いで狂犬病を発症して亡くなり、衝撃を与えた。日本では狂犬病予防法により、飼い犬には狂犬病ワクチンの接種が義務づけられており、約50年間国内での狂犬病の発症がなかったが、世界的には狂犬病が存在する国の方が圧倒的に多く、毎年、多くの人が狂犬病で亡くなっている。重要なのは狂犬病には治療法がないため、発症すればほぼ100%死に至る病気ではあるが、ワクチンで予防可能な疾患であり、潜伏期間が比較的長いいため、動物に咬まれた後のワクチン接種でも発症予防効果があることである。このように、感染症の種類や流行状況は国や地域によって大きく異なり、渡航地で流行している感染症の予防法や治療法などを知らなければ、疾病の罹患率は高くなり、時に重症化することもあり得る。

海外渡航時のワクチンには、①麻疹や風疹、水痘など自らの感染予防のみならず、周囲への感染を防止するため、主に小児期より定期接種するもの、②黄熱ワクチンのように、国際保健

図2 途上国への旅行者における各感染症の1カ月間の推定罹患率 (2010)

(Centers for Disease Control and Prevention : CDC Health Information for International Travel 2014より改変)

規則 (International Health Regulations : IHR) などに基づき、入国時に予防接種証明書を要求されることがあるもの、③A型肝炎、B型肝炎、破傷風、狂犬病、日本脳炎など渡航先で流行している感染症で、日本では存在しないか、感染するリスクが少ない病気を予防するという個人防衛の意味があるもの、という3種類がある。ワクチンによって接種の回数、効果の持続期間が異なるので、常にワクチンの記録は怠らず、長期間の免疫をもつために、次回のワクチン接種の時期を知っておくことも大切である。

現在、海外で通常で使用されているワクチンの多くが国内では未承認であり、腸チフス、コレラ、ダニ媒介性脳炎ワクチンなどは海外で、

あるいは国内では輸入代行業者などを通じ個人輸入している医療機関でしか接種できないのが現状である。また、ワクチンを接種できる医療機関が十分に整備されておらず、渡航者が海外ほど積極的にワクチン接種を行わないなどの問題があり、海外渡航者のためのワクチン接種の環境が十分に整っているとはいえない状況である。

日本渡航医学会は、2010年、海外渡航者にとって本来必要なワクチンを大きな支障なく接種できるようにすることを目的として「海外渡航者のためのワクチンガイドライン2010」を発行した⁵⁾。本ガイドラインには各ワクチンの解説だけでなく、接種法についての日本の基準と国際基準の比較、法律的事項、ワクチン基礎講

座も示されている。日本内科学会も2012年に「成人予防接種のガイダンス」を発表し、この中には「海外渡航時のワクチン」の項が盛り込まれており、このガイダンスの改訂版が本年(2016年)第105巻第8号に掲載された⁷⁾。

3. 渡航国別の情報源

接種するワクチンを決めるために渡航国別の情報源が重要である。海外渡航に関する情報源としてよく用いられるサイトに厚生労働省検疫所の「FORTH 海外で健康に過ごすために」(<http://www.forth.go.jp/>)がある。このサイトには渡航先の感染症情報、推奨ワクチン、病院紹介や日本大使館、領事館などの連絡先を知ることができ、「海外渡航者向けの予防接種実施機関(検索)」では各都道府県別にワクチン接種実施機関を簡単に検索することができる。「外務省海外安全ホームページ」(<http://www.anzen.mofa.go.jp/>)には国、地域別の最新感染症情報や危険情報が載せられている。特に、地図で地域別の危険レベルをわかりやすく示しているのが特徴である。ワクチンを選ぶ際には、前述のサイトや市販されている地域別の感染症情報のソフト(Tropimed[®], TRAVAX[®]など)などを参考に、単に目的地だけでなく、渡航期間、渡航の形態、宿泊施設、職種など様々な因子を考慮する必要がある、もちろん経済的な事情にも配慮しなくてはならない。

4. トラベルクリニックの現状

日本渡航医学会のホームページ(<http://jstah.umin.jp/>)では国内のトラベルクリニックのリストが公開されており、診療時間、未承認ワクチンを含め、取り扱っているワクチンの種類、海外健診、英文診断書作成、高山病・マラリアの予防内服処方、帰国後診療の可否やクリニックの特徴などについて詳細に掲載されている。

同ホームページには、主に日本人医師が診療を行っており、日本語に対応可能な海外のトラベルクリニックも公開されており、2016年6月現在、世界7カ国(フィリピン、シンガポール、香港、ミャンマー、ベトナム、UAE(アラブ首長国連邦)、インドネシア)の8クリニックが掲載されている。

日本渡航医学会は、2011年よりいまだ日本では数少ないトラベルクリニックを全国に普及させることを目的としたトラベルクリニックサポート事業を開始し、トラベルクリニックは地方においても徐々に増えてきている。日本渡航医学会のホームページに掲載されている国内のトラベルクリニックは事業開始前の2011年3月の時点では45施設であったが、2016年3月には90施設と2倍になった(図3)。

5. 帰国後診療の現状

トラベルクリニックの多くは渡航前の健康相談、健診、ワクチン接種や予防内服の処方などを業務としており、海外から帰国後に発熱、下痢などの症状がある人の感染症診療には必ずしも対応できない場合も少なくない。海外から帰国後の感染症に対応できる医療機関は多くはないのが現状であるが、その主な理由は輸入感染症に対応できる専門医が少ないことに加え、マラリアなどの輸入感染症の検査の多くが保険適用されていないことや治療薬が入手困難な場合があることもある。今後、専門家育成のための海外研修制度の確立や帰国後診療医療機関に対する予算措置やネットワーク化などの対応が必要と考えられる。

日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業「わが国における熱帯病・寄生虫症の最適な診断治療体制の構築」に関する研究班のホームページ(<http://trop-parasit.jp/index.html>)には、各地域における熱帯病治療薬の薬剤使用機関と診療分担責任者が公開されており、日本渡航医

2011年3月時点, 45施設

2016年3月時点, 90施設

図3 日本国内のトラベルクリニックの推移

学会のホームページにも、渡航後の発熱でマラリアや腸チフスなどが疑われる場合など、国内では稀な疾患を検査・治療することができる帰国後診療医療機関のリストが公開されている。

おわりに

日本人が以前より気軽に海外渡航するようになり、渡航地に存在する感染症に罹患する機会は今後も増加することが予想される。楽しい旅をするには渡航前に観光、ショッピングなどのみならず、健康や安全への備えが大切である。ワクチンで全ての病気を防ぐことはできない

が、少なくとも渡航地に存在し、罹患率の高い疾患、重症化しやすい疾患あるいは致死率の高い疾患でワクチンにより予防可能な疾患については、事前のワクチン接種を検討すべきと思われる。今後、日本における海外渡航者のためのワクチンの環境整備が向上するとともに、帰国後診療に対応できる医療機関の整備や輸入感染症に対応できる専門医の育成が望まれる。さらに、海外渡航者が事前に渡航地の感染症情報を収集し、必要な感染症対策を準備する習慣をもてるよう啓発していくべきであろう。

著者のCOI (conflicts of interest) 開示：渡邊 浩；講演料 (MSD, 大正富山医薬品), 寄附金 (MSD)

文献

- 1) 厚生労働科学研究費補助金・新興再興感染症研究事業 海外渡航者に対する予防接種のあり方に関する研究班：海外旅行者の予防接種 Q&A. 2008.
- 2) Moerland W, et al : The quality of travel clinics in the Netherlands. J Travel Med 13 : 356-360, 2006.
- 3) Steffen R, et al : Health problems after travel to developing countries. J Infect Dis 156 : 84-91, 1987.
- 4) Centers for Disease Control and Prevention : CDC Health Information for International Travel 2014.
- 5) 海外渡航者のためのワクチンガイドライン2010作成委員会：海外渡航者のためのワクチンガイドライン2010. 協和企画, 2010.
- 6) 日本内科学会成人予防接種検討ワーキンググループ：成人予防接種のガイダンス. 日内会誌 101 : 3585-3597, 2012.
- 7) 日本内科学会成人予防接種検討ワーキンググループ：成人予防接種のガイダンス2016年改訂版. 日内会誌 105 : 1472-1488, 2016.